【書評】「可塑的な比較造形観察理論の潜在性との隔世遺伝的再覚醒にむけて：
『かたちの生命』を二〇世紀前半の知的地勢図上において縦横に吟味する」
『図書新聞』3410号　2019年8月3日　阿部成樹著『アンリ・フォシヨンと未完の美術史：かたち・生命・歴史』岩波書店

書評

可塑的な比較造形観察理論の潜在性と、その隔世遺伝的再覚醒にむけて

『かたちの生命』を二〇世紀前半の知的地勢図上において縦横に吟味する

稲賀繁美

阿部成樹 著
▶アンリ・フォシヨンと未完の美術史
かたち・生命・歴史
5・10刊　A5判432頁　本体9800円
岩波書店

「あなたはフォシヨンをご存じない。残念なことです。彼は丸く大きな頭をして、白くなった立派な口ひげを蓄え、まるでモグラのように近眼で、ほとんど猫背です。そして人当たりが柔らかい（……）。彼はまるで男が自分の愛する女について語るように、大聖堂について語ります。（……）彼は私たちに、博識と才気、茶目っ気、官能性、そして知性でまばゆいばかりの口頭発表をしました」。

ブルゴーニュ地方オーセール近郊のボンティニーで毎年開催されていた「十日会」。ポール・デュジャルダンの創設にかかり、現在ではノルマンディーはセリジーの国際集会に継承されている。これはその一九三四年の会合への参加者のひとりが残した証言。風采あがらず衣服の汚れにも無頓着ながら、それに勝る雄弁と人柄の魅力で聞き手を圧倒した、初老の登壇者の姿が彷彿とする。本書はこの中世美術史研究の泰斗の足跡を、世紀末から第二次大戦へと向かう世相の裡に描きあげる。評伝ではなく、同時代の知的環境の変貌の裡に学術の生態を抉り出す。769もの註を備えた浩瀚・細心な研究書であり、諸外国にも類例を見ない。著者はつとに名著『かたちの生命』を翻訳している。

構造主義の絶頂に続く「理論」時代の末期といってよい一九八六年に刊行された論集でジャン・モリノは、フォシヨンには理論と呼ぶに耐える確固たる構築はなく、よき歴史家に理論家は少ない、とする前提から出発していた。だが対象との接触において変幻しえぬ硬直した分析道具など、どこまで有効だと言えるのか――、と議論は進む。ここに萌す「理論」観の刷新を三十年後に遥か先にまで推し進めたのが、まずは本書第一の功績だろう。

『日本精髄試論』『北斎』や『仏教美術』をも著したフォシヨンは、矛盾する諸力、異なる速度のヴェクトルが収斂する場、意味が産出する「裂け目」を「かたち」に見る。そして直の影響を確認できない遠隔地や別の時代にも「精神的血族」の出現を確認する。彼はそこで、俗流プラトン主義に見られる「形相」と「質量」との二分法を最初から退ける。素材は制約ではなく「かたち」を育む必須の媒体にして試練である。人間の手はそこにおいて思考し、素材に痕跡を残しつつ造形を成し遂げる。そこに変異が「命」として宿る。「精神が手を作る」のみならず「手が精神を為す」。版画家の息子は、確信をもってそう語る。

本書のふたつ目の功績は、こうした造形作品に密着したフォシヨンの思索を、幼少の経験や第三共和政の教育制度の変貌、知的環境の現場に密着して周到に解明したこと。ユルム街に現存する師範学校の卒業生たちは堅固な同志意識を育み、世俗化と社会改革の気風を醸成する。著者はフォシヨンの「手」の礼賛をエンゲルスの労働観に比べ、リヨン美術館での展示実践に、分類目録や宝物集積からの脱皮と、「かたちの生命」提示への志向を捉える。先行する歴史家アンリ・ピレンヌから受け継がれた比較史の視野はリュシアン・フェーブルやマルク・ブロックといった同時代の史家、将来のアナール派の近傍に位置づけられる。その一方ルイ・ディミエやアンリ・マンスらに代表される国粋主義や、ドイツ語圏「文化」論の民族主義との対比も摘出しつつ、「文明」に内在するフランス流普遍志向の孕む撞着も、クルティウスやヴァレリーらの認識との比較の裡に浮き彫りにされてゆく。

以上の精査は、第三に従来の理論構築とは異次元の、新たな方法論提唱へと我々を導く。遺品に「過去の現前」を直観するフォシヨンの姿勢を、著者はマルセル・プルーストの「想起」と見事に重ねあわせ、「かたち」に刻印された「異なる時間」の重層／重奏に「生命」の胎動を探る。それは固有の「血と大地」に基づく「民族」や「時代精神」という軛から「かたち」を解放する。とともに観察者を開け放たれた「比較」の沃野へと誘う。ここに伝播域と文化圏との混同という、汎インド美術史の草分け、A.K.クーマラスワーミにも共通する揺らぎや、細部の相互比較が或る日、綜合的認識へと飛翔するブロックの「動画の復元」としての史的覚醒、映画の「逆回し」の比喩が喚起される。

評者は拙著で前者に「気象学的構想力」、後者には「地学的想像力」との名称を与えてみたが、本書著者はそれを同時代の人文地理学、黎明期社会学、民族学、生物学さらには言語学の展開と詳細に相互照射し、照応相映の実相へと迫る。ここに構想された「博物誌」「理念史」は、「様式」の栄枯盛衰の自律的自己発展の観察者――といった従来のフォシヨン観を、完膚なきまでに払拭する。

圧倒的達成だけに、本著の延長上で、著者の見解を尋ねたい。そこには戦前の知識人界と戦後の大衆化社会との落差、価値観の大変貌が絡まる。まず昨今の「全球美術史」への志向と両大戦間の世界市民的傾向との相性は？　とりわけ英語に不如意なフォシヨンの晩年の頻繁な北米往還や、亡命先ニューヘイヴンでの客死との関係で（『ゲンロン3』特集「脱戦後日本美術」参照）。次に『オリエンタリズム』論争後に『人類学的思考の歴史』（竹沢尚一郎）が直面してきた認識論的陥穽（柳沢史明『ニグロ芸術』の思想文化史』ほか）との切り結びは？　反ベタン体制の「自由フランス」も植民地政策肯定だったのは、言うまでもない。第三に「形態学」的関心を喪失して久しい分子生物学の「生命観」との関わり。具体的には第六章が詳述するダニエル・ローザやジョルジュ・モンタンドンらの「全発生」、ologénèseの「時代錯誤」な再「覚醒」は可能なのか？　内因と外因との間に心因＝亡霊を想定し、形態と機能／意味との齟齬や相互変容に「奇形学」tératologieを設定するのは、「歩みの中」での探求になお残された「無限の更新」（336頁）たりうるのか？　ここには「過去の再生」を巡って、エドガー・ヴィント、ジャン・セズネックらの再評価如何も絡まるだろう。

以上もとより「誇大妄想」（286頁）は先刻承知のうえ。舌足らずで恐縮だが、木村素衛や三木清をも召喚する著者の力量に恃んでの質問である。折から松井裕美『キュビスム芸術史』や岡﨑乾二郎『抽象の力』が刊行された。それらとの併読から、現今の知的閉塞を打破する貴重な契機が、両大戦間に潜むことを示唆された。末尾に一言触れて学恩に謝す。

（国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学）